2023年度日本選挙学会　ポスターセッション

いつ会話は「政治的」になるのか

岡田葦生（関西学院大学・日本学術振興会）

追加資料はこちら👉

mail: masked.orange@gmail.com

1．研究の背景

1-1　本研究の目的

・政治的会話は最もミクロかつ初歩的な市民性涵養の行為
…　政治知識(Eveland,2004), 政治参加(横山・稲葉,2016), 寛容性(Ikeda et al.,2009)etc.

・一方で、対人摩擦のリスクを孕むため生起の困難さも指摘されている(Klar & Krupnikov,2016)

・鍵は政治的会話の**論争性**(会話相手と選好が食い違う主観的リスク)とされている
…　論争性があるからこそ横断的接触が実現する(Huckfeldt et al., 2004; Mutz, 2006)
→　しかし、同時に回避につながる要素でもある(Eliasoph,1998; Mutz,2006)

・論争性は会話を政治的と認識するかにも影響する(Fitzgerald,2013; Walsh,2004)ため、そもそも「政治的」と認識されることが会話への抵抗感を招いている可能性

・**本研究の目的：論争性が政治的会話への抵抗感・政治性に与える影響の検証**

1-2　先行研究：政治的会話と論争性

・政治的会話はいくつかの要素に分解可能(「**話者特性**」「**社会的場面**」「**ネットワーク**」「**内容**」)

話者特性：パーソナリティ,対立回避志向(Hibbing et al.,2011; Ulbig & Funk,1999)

社会的場面：家族・友人・職場(Huckfeldt&Sprague,1995;Wyatt et al.,2000)

ネットワーク：どのようなネットワーク内で政治的会話は生起しているのか（Gerber et al.,2012; Huckfeldt et al.,2004; Song, 2015）

内容：話題の対象や触れ方(Morey & Eveland,2016; 横山・稲葉,2014)

・主に論争性を扱っているのはネットワークに着目する研究群
…　「政治的選好の異質性≒論争性」とし、政治的会話との関係を検証

1-3　課題：論争性の操作

問題点１：会話相手の選好が判明しているという前提

・ネットワークに着目する研究群の基本的な問いは「会話相手と自身の選好が食い違う場合に政治的会話は生起するか」(Gerber et al.,2012; Klofstad et al.,2013)
→　「会話相手の選好が判明している（or十分に予測可能）」という前提

・しかし、会話相手の選好が十分に判明しておらず、相手の発言内容を聞いてようやく選好を推論できる、という場面も存在するはず
→　「内容」の角度からも検証する必要性

問題点２：シナリオの日常性

・政治的会話研究においては、日常的な場面における会話を取り扱う必要性が主張されてきた(Conover & Miller,2018; Eveland et al.,2011)
→　ネットワークに着目する研究群の知見は、日常的な会話場面には妥当しにくい

・「内容」を扱っている研究でも、シナリオの自然さには改善の余地がある

秦・横山(2016)：「(居酒屋・喫茶店での会話の中で)知り合いに~党から立候補する予定の人がいる」
→　動員を強く予期させる

Fitzgerald(2013)：「（ある争点について市民による討議が行われたという場面で）満場一致or賛否が分かれた」
→　日常でも選好の不一致というより熟議場面での意見衝突

2．仮説

仮説1：言及対象の効果
…　現状変革を訴えるのは常に少数派
→　H1a：野党に言及する発言は与党に言及する発言よりも政治的とみなされる
　　H1b：野党に言及する発言は与党に言及する発言よりも抵抗感が抱かれやすい

仮説2：賛否の効果
…　支持の方略には、直接的な肯定だけでなく、対になっている立場の否定もあるはず
→　現状否定の行為(社会運動など)は「攻撃的」などのステレオタイプを抱かれる（Bashir et al.,2013;山本,2017）
→　肯定と否定の間には非対称性が存在する可能性
→　H2a：否定の発言は肯定の発言よりも政治的とみなされる
　　H2b：否定の発言は肯定の発言よりも抵抗感が抱かれやすい

※　支持政党ごとの傾向については探索的に検討

3．実験デザインとデータ

3-1　実験デザイン

・言及対象(与党, 野党, 与党＆野党, 対象なし)×賛否(肯定, 否定)×支持政党(与党支持者, 野党支持者, 支持政党なし)の3要因9水準の参加者間実験

・本研究のシナリオ

導入文：*あなたがご友人と二人でニュースを目にした場面を想像してください。その時、会話の中でご友人が次のような発言をしました。*

刺激文：*日本の政治が*[*なかなかうまくいかない*/*なんだかんだでうまくいってる*]*のって、*[*自民党*/*野党*/*与党と野党*/言及なし]*が*[*ダメだから*/*いてくれてるから*]*だよね*

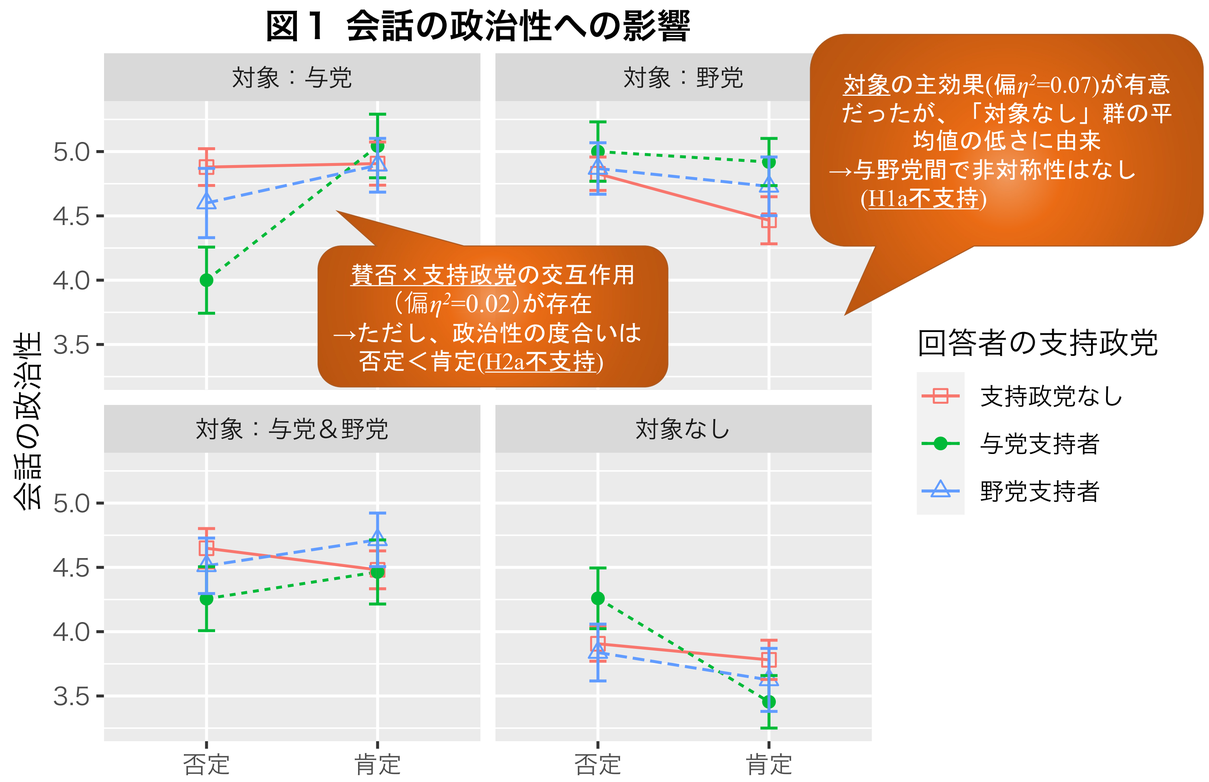
3-2　データ

・クラウドソーシング（Lancers）で募集（N＝1219）

・調査期間：2023/5/2~4

4．実証分析

図１ 会話の政治性への影響

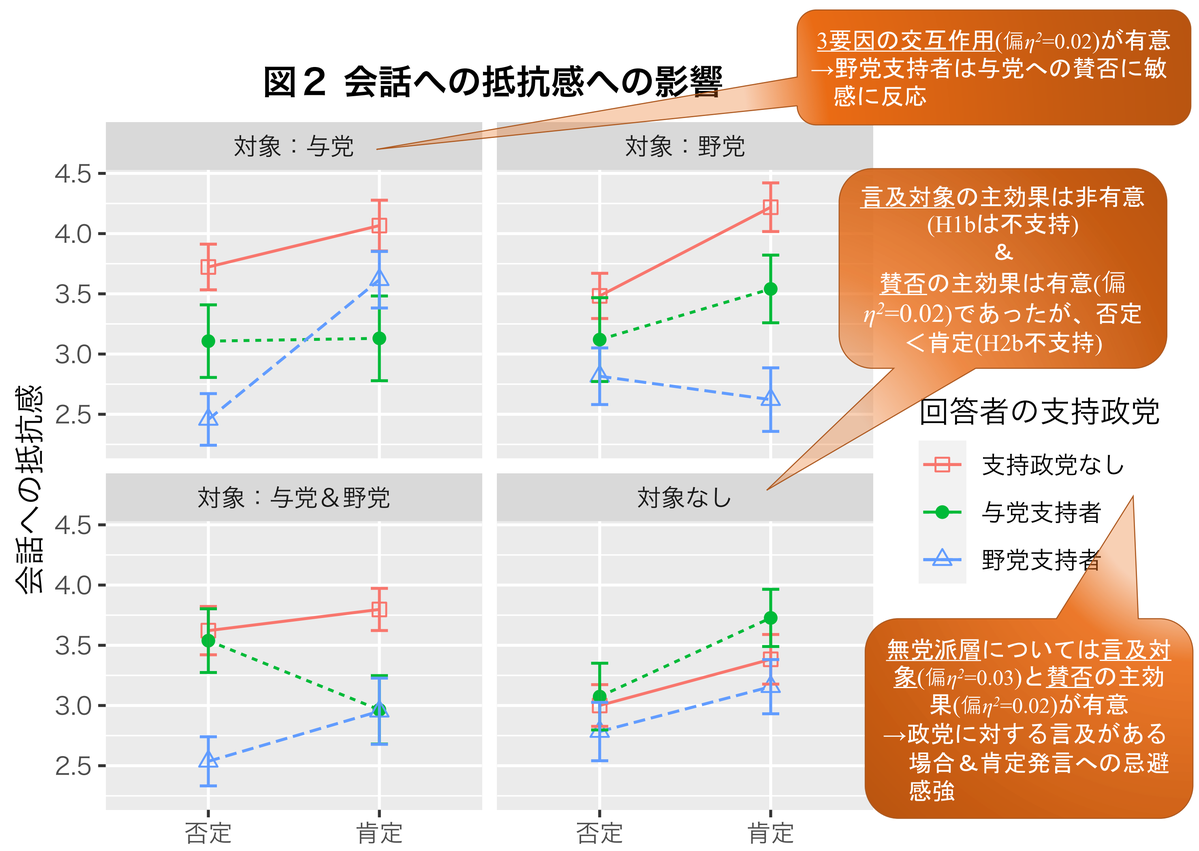


解釈

・「政治」という単語が含まれる発言であっても、発言に何らかの政治アクターが含まれなければ「政治的」会話とはならない可能性（横山(2019)とも合致）

・「(カジュアルな)政治批判 =共通言語としての権力者批判」？（cf. 稲増,2015）
→　否定が「政治的」と認識されるためには、より強い語気が必要？＆肯定は動員を連想させた可能性

図２ 会話への抵抗感への影響



解釈

・少数派である野党支持者は、自他の党派の一致＆多数派・少数派関係に敏感（Noelle-Neumann(1993); 秦・横山(2016)とも一致）
→　ただし、この傾向は「言及対象が敵対党派(与党)」の場合の方が顕著(野党への批判には慣れているor賛否によって実際に想起する対象が分散？)

・無党派層は「政党への言及」が存在した時のみ会話への抵抗感が増加(秦・横山(2016)と一致)
→　政党拒否(cf. 善教・秦,2017)に基づいている無党派層？

・「党派に対する肯定」は(聞き手にとっては)「穏便なコミュニケーション」ではなく、それ以外の意図を含んだ可能性
→　動員を予期させた？(日本における動員拒否率の高さ, cf. 荒井,2014)

5．結論と今後の方針

5-1　結論

・本研究では論争性を「言及対象」「賛否」の視点から操作

・特に「賛否」は、論争性を扱った研究の文脈では新しい視点
→　会話の政治性・抵抗感それぞれについて(傾向は異なるが)影響が見られた
→　全体的に「肯定」の方が「否定」よりも政治的・高抵抗感
→　「政治的アクターの肯定」の認知については更なる検証の必要性

5-2　今後の方針

・対象×相手の賛否×自身の賛否というフレームワークの、争点ごとの分析への応用
→　ランダム化要因配置実験(Hainmueller et al.,2014)やトピックサンプリング(Clifford et al., 2023)による複数の争点を用いたサーベイ実験

・「政治を肯定する」という行為に対する有権者の認知や帰結の検証